

## 論文内容の要約

論文名	Incidence of Abnormal Retropharyngeal Lymph Nodes in Sinonasal Malignancies among Adults
氏名	崔 朝理
<p>【目的】咽頭後リンパ節は、鼻咽頭悪性腫瘍が高確率に転移を来すリンパ節として知られており、鼻咽頭のリンパドレナージ経路において first order node とされているが、通常の診察では確認し難い事や、外科的アプローチが困難な事から、画像診断による評価が重要なリンパ節の一つである。本研究では未だ報告されていない、成人鼻腔・副鼻腔悪性腫瘍における咽頭後リンパ節の病的腫大の発生率について後方視的に検討した。</p> <p>【対象】2001 年 9 月から 2014 年 4 月の間に病理学的に鼻腔・副鼻腔悪性腫瘍と診断された 20 歳以上の連続 89 症例を対象とした。</p> <p>【方法】咽頭後リンパ節の病的腫大は最大短径 5mm 以上と設定。原発病変の組織型別に咽頭後リンパ節病的腫大の有無を検討した。また、原発腫瘍の局在を、翼口蓋窩を境界として前部病変、後部病変とに分け、咽頭後リンパ節病的腫大の発生率に差があるかを Fisher の正確確率検定を用いて検討した。</p> <p>【結果】咽頭後リンパ節の病的腫大は 89 例中 13 例（15%）で見られた。組織別には扁平上皮癌 41 例中 6 例（15%）、悪性リンパ腫 24 例中 4 例（17%）、嗅神経芽細胞腫 5 例中 3 例（60%）、その他の組織型では見られなかった。局在に関しては、前部病変 39 例中 4 例（10%）、後部病変 50 例中 9 例（18%）で前部・後部病変での咽頭後リンパ節病的腫大発生率に統計学的有意差はなかった。</p> <p>【結論】咽頭後リンパ節病的腫大の発生率は原発巣の組織型では嗅神経芽細胞腫が最も頻度が高かった。病変の局在における咽頭後リンパ節の病的腫大の発生率に統計学的有意差は見られなかった。通説的には、後部副鼻腔は咽頭後リンパ節が主なドレナージ経路であり腫瘍の転移進展経路として頻度が高いとされていたが、本研究では、前部副鼻腔・鼻腔からも咽頭後リンパ節へのドレナージ経路が存在することが示唆された。</p>	